



今こそ「家族・地域のきずな」を締め直そう

「家族・地域のきずな」フォーラム実行委員会代表
国立小児病院名誉院長

小林 登

犯罪・虐待などの毎日のニュースばかりではなく、離婚も増加し、その一方で、子どもの数は減っています。今「家族・地域のきずな」が弛み、社会に「ガタ」がきているのです。何故そうなったのでしょうか。科学・技術の進歩のお蔭で物質的に豊かになり過ぎた事も、その理由のひとつです。公害・環境汚染、生活廃棄物・産業廃棄物の山を見れば、それは明らかなことです。同時に、心も汚染され、行き過ぎた個人主義・物質万能主義となり、人間関係が希薄になった結果、「家族・地域のきずな」も弛んだのでしょうか。

「家族・地域のきずな」を締め直すには、遊び・スポーツ・お祭などによってお互い同士が豊かに触れ合える社会にすると共に、次の時代を担う子ども達を心豊かに育てる事が必要です。それは家庭の育児であり、地域の保育や教育です。現在、保育や教育は専門家によって行われていますが、その昔やっていた様に、それぞれを人間の営みとして関係づける必要があります。子どもを中心に地域の人々も巻き込めば、より良い子育てが可能となり、「家族・地域のきずな」も強まるのではないのでしょうか。今こそ子どもの目線に立って、子育てをチャイルドケアリング・デザインする時にあります。

「家族・地域のきずなを再生する国民運動」の実施にあたって

未来を担う「子どもたち」を慈しみ、守り育てることは、我が国の基礎を確かなものとしていく上で不可欠なことです。

現在の急速な少子化に対応するため、安心して子どもを生み育てることのできる環境の整備や、社会全体の働き方の改革を通じた仕事と生活の調和の推進など、少子化対策をさらに効果的・総合的かつ迅速に推進していくことが求められています。そして、これらの取組を効果的に進めていく上でも、生命を次代に伝え育んでいくことや家族・地域の力の大切さの理解を深め、その紐帯を強めていくことは極めて重要です。

このような観点から内閣府では、昨年度に引き続き「家族・地域のきずなを再生する国民運動」を実施し、11月16日の「家族の日」、その前後各1週間の「家族の週間」を中心に地方公共団体や関係団体等と連携し、大会の開催や作品募集・表彰等を通じて家族・地域のきずなの重要性について呼びかけをしてまいります。

これらの取組を通じ、国民一人ひとりが、かけがえのない家族の存在価値や地域のきずなの重要性を認識し、誰もが安心して結婚・出産・育児することができる社会の構築に資することを目指しています。

内閣府